

海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

ドイツ



Shooting of the feature film "What we want" (2022), which addresses sexuality of people with disabilities

Image: Julia Gierzynski

[Diversity: How inclusive is Germany's cultural world?](#)

目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

1. サマリー



© 2019 ono-ludwig.de

3 Bilder von Ono Ludwig: v. l. n. r. – ASPEKTE KONKRET (Forbidden Red, Vier Wahrheiten, Dichroitisch)

[Disability Arts: An Overview](#)

感じたこと

ドイツは、その第二次世界大戦と冷戦という歴史的背景から、障がいを持つ人が好ましい環境で生活できるように対応がなされてきているが、健常者により構築された仕組みの中で、機会が制限され続けている状態が今もみられる。だが、アート界では大きな変化が起きており、アートを志す障がいを持つ人が”障がい者アート”の制作者ではなく、”(障がいを持つ)アーティスト”となるよう支援する姿勢が様々なアートの分野で認められる。しかしながら今後更に変化を進めるには、”主流”アートに属する人びとからの、障がいを持つアーティストを包摂する動きや、教育機関の障がいを持つ人の受け入れへの注力が求められるようだ。

アート界での障がいを持つアーティストに対する変化は好ましいものの、より広範な、教育や国内社会全体で健常者の障がいを持つ人びとへの認識の変化が、一層の状況改善には今も求められている。

背景

全体的な障がい者の状況は、第二次世界大戦・冷戦の影響が今日の彼らへの対応に反映されているという

- (障がいを持つ人)の学校・郊外の施設・住居は、いわゆる福祉組織により運営されており、その多くが1950年代に運営を開始した。運営の基盤となった考えとは、第二次世界大戦と優生学からの教訓として、国の直接的な障がいを持つ人への対応を制限するため、施設入所の可能性への言及はなく、教育・リハビリテーション・医薬品等の提供を通し、(必要な機能が)足りていない人びとが自身の人生でできる限り好ましい機会を得ていくのを支援する、というものであった。
- (冷戦下の)西側の世界が資本主義制度がいかにうまくいくかを示す見本に西ベルリンをしたがい論見があった。そのため、西ドイツは多額の資金を教育制度に投資し、様々な学校制度を試し、特にベルリンでは結果として、障がいを持つ子どもが統合教育学校への入学ができた。

だが、現在それら施設は運営維持のために障がいを持つ人を施設外の世界から隔離し、障がい者雇用に関する法律も日本と類似するが、状況は日本より悪いように思われる

- 福祉組織の存続は、障がいを持つ子ども・居住施設利用者・就労活動参加者の存在の十分な人数に左右され、それらが運営する学校も資金調達のために、十分な生徒数が必要となっている。それらの学校の運営陣は、健常者のみで、彼らが何かなされるべきか・誰が教授すべきか・障がいを持つ人に何がかれらが(そこで)できるのかを決める。従って、それらの学校が生徒を一般の学校での就学への移行支援に注力すれば、その生徒数も調達資金額も減る、というビジネスモデルは健常者のためのものである。
- (特別支援学校卒業後の道として)授産施設での作業への従事があるが、そこでの作業は仕事ではなくリハビリテーションと位置付けられているため、健常者なら最低でも最低賃金は得られる作業にもかかわらず、2ユーロ未満という恐ろしく低い賃金は違法ではない。また、そこで働く人の多くがかなりの長期間にわたり働いており、一般の労働市場で何か新しいことを試みる機会を一度も得られていない。法律では、(公的機関・民間企業で20人以上の被雇用者がいる場合)企業は最低でも被雇用者の5%が障がいを持つ人であることとし、その5%を達成していない場合、法を遵守するためだけに、授産施設と契約を交わすのである。

現状

だが、アート界は大きな変化をみせている

- EUCREA

- ドイツ語圏で100人超の会員を有する、障がいを持つ人のためのアートにおける、多様性・包摂・スキル開発を擁護し、彼らの権利を示してきた組織。
- 同組織の方針の中には以下が含まれる: 障がいを持つ人びとによるアートが”特別な分類”として区分されたり、そう評価されることのないよう、尽力を尽くしており、最重要事項として、一定の芸術的水準にある、障がいを持つ/持たないアーティストによる作品の批判的かつ平等な考察(評価)を追求する; 障がいを持つアーティストはあらゆる文化部門で可視化されるべきで、(それは)文化の促進の動きの中か、アートの部門の中でか、学術的・非学術的訓練の中でかに依らない。私たちの社会の一部が”風変わり”と表現されるようにはしたくない; 私たちは、彼らの”特別性”が(アーティストが有するものとして)当たり前のもので認識してもらいたい。
→つまり、アーティスト自身が”障がい者アートのアーティスト”と位置づけることは自由だが、EUCREAとしては、”障がい者アート”というアートの分類を設けることを否定している
→この姿勢はアート関連の専門家のKate Brehme博士の見解と沿ったものである: (障がいを持つアーティストの作品は様々な区分に分けられ、アートとしての評価も高さも多様だが)その中には、学芸員がアート界に含めるのにもっともなアート作品も存在し、健常者が大多数を占める歴史家と学芸員により示され・議論されたそれら作品の制作状況は、あまりにも頻りに障がいを持つ人びとに対して搾取的であり、究極的には、健常者のアート関連者の集団が、利用可能へのニーズを考慮してもらえない障がいを持つアーティストを踏み台に、”包摂的である”という評価を得て・維持するために障がいを持つアーティストが使われる、形式主義に至る。結果、多くの障がいを持つアーティストは、一層の隔離化とスティグマ化を感じさせる、”障がい者アート”に属するまたは分類されることを選択していない。
- 同組織の具体的な活動には以下が含まれる: ARTplus(アート関連訓練・資格プログラム); アート・文化部門での包摂実現がどう可能かを視覚化した、お手本となるプロジェクト。
- だが、同組織のマネージャーは今後も継続的に積極的な活動が必要との認識を示している: 障がい者アートの認識とそれに対する関心が高まっているとはいえ、アート界で障がいを持つアーティストの重大な存在感の低さと健常者優先主義が存在するため、インフラ・経済面での支援は極めて重要である。

劇場・映画関連でも様々な動きがみられる

- ドイツ国立文化財団がベルリンのDeutsches Theaterと連携して2025年に3日間にわたって実施した、障がいを持つアーティストの活動環境の改善を目指した、演劇・ダンス・パフォーマンスのイベントpikは、最も革新的で包摂的な劇場の取り組みである。観客は、ドイツの現代パフォーマンスアート部門の水準の向上に貢献しており、自身を”障がいを持つリーダー”と称すアーティストたちに出会う機会を得る。財団の資金提供策は、文化施設が包摂的な運営を行い、障がいを持つアート関連者の雇用促進を図ったものであった。
- 2024年に新たな芸術監督が就任してから、障がいを持つ・持たないアーティストたちが混合で働くようになった、ミュンヘンの劇場運営企業Münchner Kammerspieleは、俗に障がいと言われるものを持つアーティストと共に劇場の美学的・構造的な更なる発展への道を歩み出し、(文化)施設の1つとして、自身に問いかけ続けている。その問いかけの過程の中で、障がいを持つアーティストは、同劇場の音楽団の一員・監督・劇作家・ワークショップ主導者として、積極的にアート活動を形成していく環境が創出されると考えている。また、異なるレベルで企業・アーティスト・(文化)施設/機関・コミュニティと連携し、知識とアート活動の交換と出会いの共通のスペースの創出を試みているという。
- 実際に近い描写を生み出すため、映画・テレビ番組制作会社のUFA等のドイツの制作会社は、現在障がいを持つ俳優を起用している。その中で、それら制作会社は2010年創設された、多様性憲章のEUプラットフォームに関与していきっており、彼らは障がいを持つ登場人物を如実に再現する女性/男性俳優を探す場合、健常者の俳優を起用しないことに注意を払うようになってきている。

美術館にも変化が起きているという

- 2017年、ハンブルクの芸術ホールでの展示会"Art and Alphabet"は、その1つの例である。同展示会では、成功を収めている、認知機能障がいを持つハンブルクのある男性画家の作品が展示され、彼は、その展示室全体の展示計画を(自身で決定)しました”、と話した。
→アーティストに主体性が付与されている

滞在型プログラムも存在する

- Akademie der Künste der Weltの年次資金援助プログラムの1つである、滞在プログラムは6カ月間であり、参加型滞在プログラム2025は、障がいを持つアーティスト・活動家・アートワーカーを対象とした。プログラム運営側は、障がいには様々なものがあることを認識しており、彼らが社会の中の様々な障壁により不利な状況に置かれ、特に複数の差別を受けている人びとの応募を応援していた。運営側はプロジェクトに伴う資金の提供を行うとともに、参加者を滞在地の強力

なネットワークとともに支援し、彼らを滞在地のアート・コミュニティと接触させ、彼らがその人びとと知り合い、自身のネットワークを拡大できるようにした。

障がいを持つアーティストが参加できるネットワークも設けられている

- アートにおける利用/接触/経験可能性のためのネットワークであり障がいを持つ/持たないアーティストとアート界の調停者の混合チームが主導するBerlinklusionは、障がいの有無に依らず全てのアーティスト・アートワーカー・参加者・鑑賞者の(アートに)関与する・関わる・触れることの可能度の向上と包摂の促進による、ベルリンの文化的向上を図るため、アート関連組織に対する包摂的で参加可能なアートプロジェクトの設計とそれら組織に対し助言を提供している。同ネットワークは、10年超にわたりドイツ国内外で障がいを持つアーティストや文化的活動への参加者と活動し、年々ネットワークを拡大してきている; そのネットワークは、障がい者アート・障がいを持つ人・包摂的に活動する健常者に属する、200超のコンタクト(先)を有する。

今後の展望

今後も障がいを持つ人がアーティストとして活躍できるようにするために活動を行っていく意向が示され・必要性が指摘されていることから、積極的に続きそうである

- Kate Brehme博士は、障がい者主導・障がい者アートに特化した組織は障がいを持つアーティストの促進・支援のために多くのことをしてきたが、俗に”主流”アート部門が健常者優先主義への対応としてでき得ることが沢山あるため、ドイツには更なる努力が求められると指摘した。第一に、組織は障がいを持つアーティストに作品を依頼・展示し、障がいを持つアートワーカーを必ず組織の役員レベルで雇用すべきであるという。ドイツにも障がいを持つ人に対する法的要件が存在するが、利用可能性は、せいぜい文化的施設の物理的な利用可能性への対応にとどまり、利用可能性は無視・撤去されている場合さえある。第二に、州・国の両レベルで、メンター制度や、代替的で包摂的なアート・文化教育を提供する専門的な能力開発プログラムを含む、アーティスト・障がいを持つアーティストを支援する組織へ提供する資金の増額の必要性があるという。
- EUCREAのマネージャーは、障がいを持つ人びとにとっての最も厚い障壁の1つがアート・文化関連(学校で学業を修め)ビジネスに入っていくこと自体である、と述べた。それに対応し、EUCREAはアート教育での包摂を促進するための独自のプログラムを開始したという。2023年は、ドイツの5州の視覚・演技/パフォーマンスアートのプログラムを実施する大学がそのプログラム参加し、2024年は、他の州でも実施し、拡大すると述べた。

2. 背景



Photo: Judith Buss

[MK: Anti-gone](#)

全体的な障がい者の状況は、第二次世界大戦後からの動きが今日に影響し、冷戦の影響も特に西ベルリンでは顕著であったという

- (ある障がいを持つ活動家によると)「(障がいを持つ人)の学校・郊外の施設・住居は、いわゆる福祉組織、その多くがキリスト教系組織によって運営されています。それら福祉組織の多くが、1950年代に運営を開始し、その開始の基盤となった考えとは、施設入所の可能性への言及はなく、教育・リハビリテーション・医薬品等の提供を通し、(必要な機能が)足りていない人びとが自身の人生でできる限り好ましい機会を得ていくのを支援する、というものでした。第二次世界大戦と優生学により起きた酷い事態からの教訓として、国の直接的な障がいを持つ人に対する対応を制限するためのものでした。なので、その考えは、障がいを持つ人びとに教育や医薬品という形でできる限り好ましい機会を与えるという、よいものでした」、という。
- (上記の活動家によると)「西ベルリンは(冷戦下の)西側の世界が資本主義制度がいかにうまくいくかを示す場所としたい都市でした。そのため、彼らは多額の資金を教育制度に投資し、様々な学校制度を試したのです、特にベルリンに」、という。(結果、障がいを持つ子どもと健常者の子どもが共に学ぶ統合教育学校への入学ができた)

だが、その後、それらの障がいを持つ人のための施設は運営維持のために、利用者を留ませ、彼ら一般の学校や企業等への移行を妨げ、社会から隔離しているという

- (上記の活動家によると)「それら組織の存続は、十分な人数の利用者である障がいを持つ子ども・居住施設利用者・就労活動参加者の存在によって成り立つようになってしまったのです。[...]福祉組織が運営する学校はお金を集めるため、十分な生徒数が必要です。もしそれらの学校が生徒を一般の学校での就学を助けることが得意であれば、その生徒数は減り、集まる金額も減ります。[...]このビジネスモデルは健常者のためのものです。それらの組織の運営者は、健常者たちのみで、彼らが何かがなされるべきか・誰が教授すべきか・障がいを持つ人に何がかれらが(そこで)できるのかを決めます」、という。

現在の日本の障がい者雇用と類似点がみられ、だが、日本よりも状況は好ましくないように思える

- (上記の活動家によると)「(特別支援学校卒業後の道として)授産施設での作業への従事がありますが、障がいを持つ人は時給1.3ユーロで働いています。[...]ドイツでは、授産施設での作業は仕事ではなくリハビリテーションと位置付けられているため、違法ではありません。また、そこで働く人の多くが何年、何十年と働いており、一般の労働市場で何か新しいことを試みる機会を一度も得ることができていないのです。[...]授産施設の運営・主導側はドイツ軍やドイツの車企業と契約を交わしています。それらから仕分け・選択・清掃・製造等、健常者なら最低でも最低賃金は得られる作業(サービス)を(契約によって)購入しているのです。ドイツの法律では、(公的機関・民間企業で20人以上の被雇用者がいる場合)企業は最低でも被雇用者の5%が障がいを持つ人でなければならないとしています。その5%を達成していない場合、法を遵守するためだけに、授産施設と契約を交わします」、という。

スウェーデンの調査でもみられたように、アートと障がいの関連は比較的薄いですが、参照記事から、欧米諸国で20世紀始めから美学と心身の健康を結びつける動きがみられるようである

- 伝統的な芸術史の語りは、アートの歴史的定義の概念的土台として、アーティストの精神的・身体的スキルの称賛を強調する傾向がある。ドイツ語のKunst-Können(アートを創造することができる能力)・イタリア語のdestrezza(手で難しい動きを素早く巧みに行える能力)・英語のbravura(アートのパフォーマンス/作品にみられる感銘を与える巧みな技)等の20世紀初頭に生まれた用語から、創造活動の実践(ができる)能力が反映されており、美化された身体 of 遮られることのない統一性の表現への試みが認められる。

だが、その一方で、それ以前にアートで障がいを表現しているアーティストが存在していたことも認められ、ナチス政権下でも障がいを持つ人のアート作品に強い関心を持ち、それらを持って国外避難した人もいたという

- 多くの前近前近代のアーティストが美学的理想・アートの1つの形式・作品の規範的要素への問いかけの手法としてだけでなく、自身の作品を再考するために、機能上での多様性の描写に取り組んでいたようにみられる。
- ドイツ人教育学者Hans Würtz[...]の熱心に収集した障がいや(人間の機能上の)支障を持つ人びとに関連する作品は、究極的な健常者優先主義と障がい者差別の思想と行動がみられた、ヨーロッパの歴史上で重要な時点である、国家社会主義の台頭という政治的背景に反対する姿勢の表れであり[...]ナチスがベルリンで勢力を高めた時期に大量の作品を収集しており、単にナチス政権が当時それらに価値を見出さなかったため、それらは失わされることなく、彼の亡命先である当時のチェコスロバキアに持っていくことができた。

3. 現状



[The Quiet Room](#)

具体的なドイツの組織の活動を挙げる前に、ドイツ語圏で100人超の会員を有する、障がいを持つ人のためのアートにおける、多様性・包摂・スキル開発を擁護し、彼らの権利を示してきた組織である、**EUCREA**について言及すべきであろう

- **EUCREA**の方針として:
 - 多様性を生き生きとして多面性のあるアートの・文化的生活の創造への可能性と機会と捉え、様々な人の関与はより多くの意見・表現形式と高い多様性を意味するため、多様性のある社会から皆が恩恵を受けられると考える。
 - 障がいを持つ人びとによるアートが”特別な分類”として区分されたり、そう評価されることがないよう、尽力を尽くしており、最重要事項として、一定の芸術的水準にある、障がいを持つ/持たないアーティストによる作品の批判的かつ平等な考察(評価)を追求することを掲げている。
 - 障がいを持つアーティストはあらゆる文化部門で可視化されるべきで、(それは)文化の促進の動きの中か、アートの部門の中でか、学術的・非学術的訓練の中でかに依らない。私たちの社会の一部が”風変り”と表現されるようにはしたくない;

私たちは、彼らの”特別性”が(アーティストが有するものとして)当たり前のもので認識してもらいたい。

- 障がいを持つアーティストに、スキルの開発・習得・実践ができる沢山の機会を提供するよう、努めており、訓練に関連した”特別な分類”は不要だと考えている:むしろ、異なる種類のスキルを持つ人びとに対するアートの訓練は、個々の状況に関連する作品の質の向上と多様な(作品制作に関する)方法の促進と考えられるべきである。つまり、アーティスト自身が”障がい者アートのアーティスト”と位置づけることは自由だが、EUCREAとしては、”障がい者アート”というアートの分類を設けることを否定している。

以上のEUCREAの方針は今回の調査で参照したノルウェーの障がい学・リハビリテーション学者Per Koren Solvangの考察と反する

- EUCREAのプロジェクトマネージャーJutta Schubertは、ここ数年のドイツの文化部門のあらゆる包摂への取り組みを隣国諸国やイギリスと比較し、ドイツは”追いつかなければならないことが沢山ある”と述べており、参考にしていない国にノルウェーは入っていないのかもしれない。
- 事実、このEUCREAの考えは、イギリス・オーストラリア人の障がいを持つ独立学芸員・調査者・教育者(つまりアート関連の専門家)Kate Brehme博士の見解と沿っている。Brehme博士の意見では:
 - 障がい者アートは自己認識と(自身・他の障がいを持つ人びとに対する)力づけであると同時に差別化と搾取に関するものである。[...]”アウトサイダー・アート”や”アール・ブリュット”という欧米の歴史的作品的の種類に即座に分類されている。その一方で、学芸員がアート界に含めるのにもっともなアート作品も存在し、健常者が大多数を占める歴史家と学芸員により示され・議論されたそれら作品の制作状況は、あまりにも頻繁に障がいを持つ人びとに対して搾取的である。[...]究極的には、健常者の学芸員やアート関連従事者の集団が、利用可能へのニーズを考慮してもらえない障がいを持つアーティストを踏み台に、”包摂的である”という評価を得て・維持するために障がいを持つアーティストが使われる、形式主義に至る。結果、多くの障がいを持つアーティストは、一層の隔離化とスティグマ化を感じさせる、”障がい者アート”に属するまたは分類されることを選択していない。
 - だが、障がい者アート界/コミュニティに属することで、現代アート部門で彼らの居場所を訴えることを可能にしている。
- 同様に、イギリスの文化プロデューサーJo Verrentは、「障がいを持つアーティストは単に“アーティスト”ではないのか?イエスでありノーです。全てのアーティストがアーティストで、完全な世界でただ資金を得るためや真剣に受け止めてもらうために、ラベルが必要な人はいません。現状はそうじゃなく、前向きに自身のアイデンティティの一部とすることで、障がいを持つアー

ティストが意見を発する機会と自身を加速して前面に出せるプラットフォームを獲得できる、と論じることができるかもしれません。これはアイデンティティの問題であるアーティストもいます。彼らの作品が障がいの直接的・障がい者としての経験による非直接的な要素を反映したものであるならば、彼らにとって障がいを持つアーティストというアイデンティティを持つことは明らかに妥当です。多くの障がい者は、「障がい」という言葉を前向きに捉えており、私もそうです。障がい者であることは、女性であることや他のラベル同様に、世の中での自身の捉え方の一部を成します」と発言している。

- ドイツはイギリス同様、アーティスト自身のアイデンティティの選択に任せるものの、アートの1つの分類を設けない方向で進んでいるようである。(また、障がい者アートのアーティストの人口統計を彼女は行っているが、その際に障がいを持っていても障がい者アートのアーティストと認識されるのを求めなかったアーティストは統計の対象外としており、ドイツの統計は見つからなかったそうだが類似すると推定されており、ドイツにも同様な立場に位置するアーティストがいると思われる)

EUCREAのプロジェクトマネージャーJutta Schubertが言及した通り、Kate Brehme博士もドイツの障がい者アートには、まだまだ取り組みが必要と考えていた

- ドイツは、欧米ではアメリカと似た歴史を持ち、1960年代後半～1970年代前半の市民的権利運動と1980年代後半の障がい者の人権運動の促進が起きた。国内各地のEUCREA・Ramba Zamba TheaterとTheater Thikwa等の多くの組織は、反精神医学運動と障がいを持つ人のアート・文化への接触機会向上への要求から着想を得て、1989年以降に設立された。それ以後、特にベルリンは[...]国内や現在のドイツでの障がい者アートへの注目度を極めて高めているのに寄与するChristine Sun Kimなどの国際的な多くのアーティスト居住地となった。だが、[...]ドイツでの障がい者アート運動には重大な調査不足がみられ、インフラ・経済面での支援が不足している。世界的に障がい者アートの認識とそれに対する関心が高まっているとはいえ、アート界で障がいを持つアーティストの重大な存在感の低さと差別(言い換えれば「健常者優先主義」)が存在するため、インフラ・経済面での支援は極めて重要である。
- カナダでは、「(障がいを持つ人に)特化した/利用可能な専門的な訓練機会の欠如・物理的に利用可能な、披露/展示/編集/実践のための空間の欠如・時代遅れでスティグマ化された障がいの文化的認識・代替的な形式の欠如によるアートへの参加/関与に対する障壁の発生・プロの健常者のアーティストによる差別/支配/作品のアイデアの盗用/搾取」等の、アート界における体系的差別が報告されている。それらの実態とドイツの状況の比較は、単純にドイツでの統計が存在していないため、不可能であるが、健常者に比べ全体的な障がい者の雇用率ははるかに低いことから、アート界に属する障がい者に関しても、何かしら類似しているだろう。

EUCREAに関連する具体的事例を以下に紹介する:

- **ARTplus: アート関連訓練・資格プログラム**

プログラムに参加する演劇・芸術・音楽専門学校で障がいを持つアートの才能を持つ人びとが専門的な訓練を受けれるようにする3年間のプログラム。今日まで、障がいを持ち福祉制度を受けずに(経済的)自立している独立した創造的な人びとのドイツの文化環境に対する影響力は低いという。アート教育の新たなレベル/段階の模索のため、新しい教育の型がパートナーと参加者が共になって検討・試験されている。同プログラムは後にドキュメンタリー映画化される。また、適切な構造を用いて(アート)教育における包摂の実現という長期的目標に向け、多くの人・社会一般に注意を向けさせる説明会実施も予定している。アート・文化における根本的な包摂を実現するため、専門的なアート教育の中にそのための構造の実現を目指している。障がいを持つ才能のある人びとの、“アーティスト”になるという職業的目標の実現のための機会に対する切望に早急に対応することが求められている; それは支援の程度と彼ら個人の状況での可能性に関わらない。これは、強みと希望を与え、開放的で多様性のあるアート界の実現への変革を訴えるプログラムであると評価されている。

- **アート・文化部門での包摂実現がどう可能かを視覚化した、お手本となるプロジェクト**

EUCREAは障がいを持つアーティストに対するアーティスト・文化施設/機関・政治・行政の意識向上を図っている; その取り組みが協働と訓練プログラムの設計や雇用の状況の改善を促している。EUCREAは定期的な討論会と出版/公開を設けて、(障がいを持つアーティストの)テーマに関する議論・話し合いの場の中心となり、芸術的・政治的・制度上の観点での継続中の議論の形成・監督を行う。アートのレベルでEUCREAは、あらゆるアート分野でのイベントの企画策定に関与しており、多様性を推進し、アートの捉え方に影響を与え、新たな対話を発生させている。

EUCREAとは関連していない、劇場・映画関連での動きを以下に紹介する

- **pik**

障がいを持つアーティストの活動環境の改善を目指した、2025年に3日間にわたって開催された、最も革新的で包摂的な劇場の取り組みである、演劇・ダンス・パフォーマンスのイベント。観客は、ドイツの現代パフォーマンスアート部門の水準の向上に貢献しており、自身を“障がいを持つリーダー”と称すアーティストたちに出会う機会を得る。これは、ドイツ国立文化財団がベルリンのDeutsches Theaterと連携して実施され、本プログラムの資金提供策は、文化施設が包摂的な運営を行い、障がいを持つアートに関連する人を雇用することを促すものである。

- **Münchener Kammerspiele**

ミュンヘンの劇場運営企業で、俗に障がいと言われるものを持つアーティストと共に劇場の美学的・構造的な更なる発展への道を歩み出している。(同企業は、)(文化)施設の1つとして、自身に問う: 俗に障がいと言われるものを持つアーティストがアート活動を妨げられないようにするために、どんなニーズを持っているのか[...]活動速度の同僚が共にうまく働くためには、深めるべき理解の範囲はどれ程のものなのか[...]観客と出演者にとって利用可能になるにはどんな変更がなされる必要があるのか。多様性のある音楽団・チームに必要なスキルとは何か[...]彼らに既存の構造に適応するようにさせることなく、彼らが既存の構造を拡大・変化できることをいかに保証できるのか。Münchener Kammerspieleでの上演作品に関し、どうしたら彼らが意思決定レベルで積極性を示し、将来にも残続ける功績を残せるのか[...]しかしながら、彼らは、ここで音楽団の一員・監督・劇作家・ワークショップ主導者として、積極的にアート活動を形成していこう。[...]私たちは、異なるレベルで企業・アーティスト・(文化)施設/機関・コミュニティと連携している。私たちは、知識とアート活動の交換と出会いの共通のスペースを創出したいのだ。2024年、Barbara Mundelが芸術監督として就いてから、障がいを持つ・持たないアーティストたちが混合で働くようになった。私たちの作品・招聘したアーティストによるパフォーマンス・音楽・舞台美術装置(パネル)によって、私たちは美学的多様性を披露し現在の専門家の議論状況を反映している。加えて、パーティーやカジュアルな交流の場も設けている。

- 映画・テレビ番組制作会社である株式会社UFA等のドイツの制作会社実際に近い描写を生み出すため、現在障がいを持つ俳優を起用している。その中で、それら制作会社は2010年創設された、多様性憲章のEUプラットフォームに関与している。[...]ドイツの制作会社は登場人物、例えば移民で車いすを利用している人物や骨形成不全症を持つ人物、を如実に再現する女性/男性俳優を探す場合、健常者の俳優を起用しないことに注意を払うようになってきている。

美術館にも変化が起きているという

- **Art and Alphabet**

2017年にハンブルクの芸術ホールで開催された展示会である。同展示会では、成功を収めている、認知機能障がいを持つハンブルクの画家Harald Stoffersの作品が展示され、彼は、その展示室全体の展示計画を(自身で決定)しました”、と話した。

- **2000年にドイツで、認知機能障がいを持つアート制作を行う人びとを対象とする特別賞が設けられた**

Augustinum基金が"Euward"という賞を3年毎にヨーロッパのアーティストに授ける。そこで選ばれた3名の受賞者は様々なものを付与されるが、中でもドイツ・ミュンヘンの美術館Haus der Kunstでの展示会の機会は、彼らの作品が人びとの目に触れる機会を得ることを意味する。

滞在型プログラムも存在する

- Akademie der Künste der Weltの年次資金援助プログラムの1つで、同プログラムでは、ケルンで滞在費用が賄われた滞在地が付与され、ある特定のアートプロジェクトからの支援を受けることができる。滞在プログラムは6か月間であり、(特定のアートプロジェクト)は毎回異なる。参加型滞在プログラム2025は、障がいを持つアーティスト・活動家・アートワーカーを対象としている。プログラム運営側は、障がいには様々なものがあることを認識していた。障がいを持つ人びとは社会の中の様々な障壁によって不利な状況に置かれている。[...]プログラム運営側は、特に複数の差別を受けている人びとの応募を応援している; 例えば障がいとジェンダーに起因する差別を受けている人びとだ。運営側はプロジェクトに伴う資金の提供を行うとともに、参加者を現地の強力なネットワークとともに支援し、彼らをケルンのアート・コミュニティと接触させ、彼らがそこの人びとと知り合い、自身のネットワークを拡大できるようにする。

障がいを持つアーティストが参加できるネットワークも設けられている

- Berlinklusionは、アートにおける利用/接触/経験可能性のためのネットワークで、障がいを持つ/持たないアーティストとアートにおける調停者の混合チームが主導している。私たちは、アート関連組織に対する包摂的で参加可能なアートプロジェクトの設計とそれら組織に対し助言を提供している。私たちは、障がいの有無に依らず全てのアーティスト・アートワーカー・参加者・鑑賞者の(アートに)関与する・関わる・触れることをより可能にすることと包摂を促進することにより、ベルリンの文化的環境を好ましい方向に変えることを試みている。私たちは10年超にわたりドイツ国内外で障がいを持つアーティストや文化的活動への参加者と活動してきた。それにより、年々ネットワークを構築してきた。そのネットワークは、障がい者アート・障がいを持つ人・包摂的に活動する健常者に属する、200超のコンタクト(先)を有する。

4. 今後の展望



©Un-Label, Photo: Giannis-Chatziantoniou
Image: Giannis-Chatziantoniou

[Participatory Residency Program 2025](#)

参照記事からは、障がいを持つアーティストの意見は見つけれなかったが、アート界だけでなく社会全体で障がいを持つ人びとが隔離されてきたことを考慮すると、障がいを持つ人がアートに触れる機会がほぼなかったのかもしれない。そのためか、アート界・社会全体ともに障がいを持つ人びとの包摂を進める意向を示す/必要性を指摘する内容が示されている

- (Kate Brehme博士によると、)更なる努力が、特にドイツでは、求められる。それらの障がい者主導・障がい者アートに特化した組織は障がいを持つアーティストの促進・支援のために多くのことをしてきたが、俗に”主流”アート部門が健常者優先主義への対応としてでき得ることが沢山ある。第一に、組織は障がいを持つアーティストに作品を依頼・展示し、障がいを持つアートワーカーを必ず組織の役員レベルで雇用すべきである。[...]障がいを持つ人に対する法的要件が各国には存在し、ドイツも例外ではないが[...]ドイツで利用可能性は、せいぜい文化的施設の物理的な利用可能性への対応にとどまり、最悪の場合、利用可能性は無視・撤去されている。そして、州・国の両レベルで、メンター制度や、代替的で包摂的なアート・文化教育を提供する専門的な能力開発プログラムを含む、アーティスト・障がいを持つアーティストを支援する組織へ提供する資金の増額が求められる。それらのドイツでの好事例として、DurchstartenやImpact Funds等の新しい資金調達源は、ベルリンにいる障がいを持つアーティスト各人に資金を提供している。

- (EUCREAのJutta Schubertによると、)障がいを持つ人びとにとっての最も厚い障壁の1つがアート・文化関連ビジネスに入っていくこと自体であり、彼女は、“演劇学校では、ここ数年まで障がいは入学対象外となる要素でした”、と説明した。だが、学校は(障がいを持つ人に対し)より開かれた存在になってきている、と彼女は付け加えた。EUCREAは、アート教育での包摂を促進するための独自のプログラムを開始した。2023年時点で、ドイツの5州の視覚・演技/パフォーマンスアートのプログラムを実施する大学が参加していた。2024年は、同プログラムは他の州でも実施し、拡大する予定である。
- (チューリッヒ大学の調査プロジェクトについて)平等なアートへの接触機会は大多数のアート施設/機関にとって最重要目標とされており、同プロジェクトは施設内のスペースに関する方針の再考と美術館や他のアート機関での異なる意見を持つ人びとの包摂による対話型実践に対する働きかけを行い、障がい・(障がいを持つ人のアートへの)接触可能性・機能上での多様性を持つ人の機能をデザイン/建築/展示会場の設定における創造性を強化させることに対する直近の対話での反応を調べた。[...]同プロジェクトの調査は、利用可能性を特にアートにおける制度と仕組みに焦点を当て、政治的・社会的包摂の形とさせる重要性を訴えるものになるべきである。

5. 参照記事一覧

- [Disability Arts: An Overview](#)
- [Diversity: How inclusive is Germany's cultural world?](#)
- [Participatory Residency Program 2025](#)
- [Pik](#)
- [Berlinklusion: About](#)
- [All Abled Arts](#)
- [Artist and academic shining light on disability artwork](#)
- [ARTplus - Artistic training and qualification for creatives with disabilities by EUCREA Verband Kunst und Behinderung e.V.](#)
- [Rethinking Art History Through Disability](#)
- [EUCREA: About](#)
- [Rights of people with a severe disability](#)
- [The choices are not equal](#)

6. アーティスト紹介

- [Sophia Neises](#)
- Merten Fellmann



- Elias von Martial



- Andrea Wolf

